

気象講演会

いまどきの天気予報

講演

気象観測最前線

水野 量 釧路地方気象台長

気象予測技術の進歩

黒良 龍太 札幌管区気象台 予報課長

新世代長期予報

志田 昌之 札幌管区気象台 気候・調査課長

天気予報改善のカギ

山崎 孝治 北海道大学 大学院地球環境科学研究院 教授

司会 加藤 真奈美 お天気キャスター（日本気象協会）

入場無料：一般200名

事前申し込みは不要です。当日、会場までお越しください。

日時：11月26日（土）

14時00分～16時30分

場所：北海道大学大学院環境科学院2階

大講義室（D201室）

JR札幌駅北口から徒歩10分、地下鉄南北線北12条駅から徒歩5分

<主催：日本気象学会北海道支部>

お問合せ先：支部事務局（札幌管区気象台内） 電話 011-611-6147



明治17(1884)年6月1日に、気象庁の前身の東京気象台から最初の天気予報が発表されました。

第1回目の天気予報は日本全国を一つの文章で表現する「全国一般風ノ向キハ定リナシ天気ハ変リ易シ 但シ雨天勝チ」という大まかなものでした。背景の天気図は、その時のものです。【天気図提供：気象庁】

平成23年度 気象講演会



「気象観測最前線」 水野 量 釧路地方気象台長

1980年青森地方気象台、仙台管区気象台、気象研究所物理気象研究部、気象大学校、気象庁観測部観測ネットワーク調整官などを経て、2011年4月より現職。

各種気象観測によって把握される大気の状態を基礎にして、天気予報が作成されている。気象観測を観測方法により分類すると、大気の状態を直接観測する現場観測(地上気象観測、高層気象観測など)と、遠隔に測定するリモートセンシング(気象衛星観測、気象レーダー観測など)に分類される。各種気象観測の現状と課題を整理して紹介する。



「気象予測技術の進歩」 黒良 龍太 札幌管区気象台 予報課長

気象大学校卒業。1982年気象庁入庁し、神戸海洋気象台や気象庁、松江・広島地方気象台で予報業務や開発業務に従事。気象庁予報部予報課調査官・予報官等を経て、2010年4月より現職。

天気予報を支える予測技術は、観測技術やシステムの進歩、数値予報の高度化・精緻化と共に進化してきた。気象庁における、局地的な大雨を予測する技術開発の取り組み、数時間先の豪雨や竜巻などの激しい突風を予測する技術について紹介する。



「新世代長期予報」 志田 昌之 札幌管区気象台 気候・調査課長

1973年旭川地方気象台を振り出しに道内気象官署に勤務し、札幌管区気象台予報官、防災気象官、防災調整官、旭川の防災業務課長、技術課長を経て、2010年4月より現職。

冷夏による水稲被害に悩まされ、どうにかしてその兆候を事前に察知するために「長期予報」が生まれた。しかし、当時の予測精度は十分なものではなかった。現在は、幾多の試練を乗り越え、気象学やコンピュータの発達により「アンサンブル数値予報」という予測手法に辿り着いた。季節予報の歴史や利用について紹介する。



「天気予報改善のカギ」

山崎 孝治 北海道大学 大学院地球環境科学研究院 教授

東京教育大学理学研究科修士課程(応用物理専攻)修了後、気象庁勤務。予報課を経て気象研究所。理学博士。主に大気大循環モデルの開発や長期予報関係の研究に携わる。1994年より北海道大学の現職。気候変動解析が主な研究テーマ。

天気予報／長期予報をさらに改善するために重要な事項について考える。数値予報モデルの改良や観測の充実及びコンピュータ能力向上は当然必要であるが、観測とモデルを繋ぐデータ同化技術の進歩が重要であろう。また中緯度大気は2週間程度の記憶しかないので決定論的予測は2週間程度が限度である。そのため長期予報ではより長い記憶を持つものの活用が鍵となるであろう。



司会:加藤 眞奈美

- 1999年 日本気象協会北海道支社に入社
テレビ・ラジオでお茶の間に気象情報を伝えるお天気キャスターとして活躍
- 2000年 NHK札幌放送局 「おはよう北海道」
同番組女性としては初の気象キャスターに抜擢
- 2002年 NHK帯広放送局 「なるほど十勝の天気」を担当
- 2008年 NHK札幌放送局 夕方の気象情報を担当 現在に至る